

松下幸之助記念財団 研究助成
研究報告

(MS Word データ送信)

【氏名】

能田昂

【所属】(助成決定時)

東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科博士課程発達支援講座 1年

【研究題目】

近代日本における災害救済と障害・疾病等を有する子どもの特別教育史研究

【研究の目的】(400字程度)

2011(平成23)年の東日本大震災による避難者数は依然として6万人近く、特に子どもには不安・恐怖・緊張・抑うつ・ストレス等の膨大な蓄積があると想定される。歴史的にも各種の災害によって社会的弱者が過酷な状況に追い込まれてきた。家族を奪い、子どもの成長・発達に不可欠な安全で安定した環境を破壊し、日常を大きく破綻させる災害、その異常な状況下で子どもは苦悩しながら生きてきた。地震や台風・水害が相次ぐ現代においても子どもの受苦は変わることなく続いている。

本研究は「災害と子ども被災・救済の特別教育史」の開拓を目指し、過去の代表的な災害における救済の諸相や子ども(孤児・障害児者含む)の被災の実態について、特に「濃尾震災」での事例を中心に明らかにすることを目的とする。「濃尾震災」によって社会的弱者が抱えた「生活と発達の困難」や、救済保護活動がその後の障害児教育保護システムの成立に与えた影響の如何についても検討する。

【研究の内容・方法】(800字程度)

1891(明治24)年10月28日に岐阜県を中心に発生した「濃尾震災」は、近代的な国家制度を整えつつあった日本に強い衝撃を与えた。まさに国家運営を見定めていた時期であり、国土を分断した災害が当時の社会制度の矛盾や課題を明確に露呈させるなか、精力的に孤児・孤女や社会的弱者の救済活動にあたったのは、主には石井亮一・森巻耳を始めとする全国のキリスト教徒らであった。本研究は特別支援教育の立場から、特別なニーズを持った児童・社会的弱者の災害の経験を明らかにしながら、命を守り育てる救済と教育保護の成立の実態を通して次世代の育成・発達保障の課題についても注目していく。

- ① 東日本大震災を始めとする現代の災害における子ども・若者の被災の実態と教育に関する研究の動向、また明治期の子どもを中心とした社会的弱者救済・施設史研究、濃尾震災発生前後の児童救済に関する研究動向の把握を行う。
- ② 濃尾震災を始めとする明治期の災害において活動を行った複数の児童保護救済事業について検討を行う。当時、「子ども存在の軽視、障害児の生命・生存の保障という視点の欠落」のなかでの災害発災により、生活救済・地域復興という名目において過酷な復興児童労働や女児を対象とした人身売買などが発生した。その中で、多くの民間宗教慈善家らによる救済事業が国や県行政の救済対応の不足を補った。対象児童の被災実態やその後の成長・発達への影響、また救済事業誕生の経緯(国内外の支援母体の影響等)に関しても史料調査・検討を行う。震災孤児院(石井十次)や滝乃川学園(石井亮一)、岐阜訓盲院(森巻耳)などの民間救済施設を中心に検討する。

本研究は主に文献研究となり、国立国会図書館をはじめとする全国の図書館・公文書館にて震災時の行政対応資料や、その他の各民間事業について立教大学図書館や滝乃川学園、石井記念友愛社、桃山学院史料室、

日本聖公会史料室、岡山県記録資料館等の資料を調査するものである。

【結論・考察】（４００字程度）

明治期の災害における児童保護救済事業の実態について調査検討を行った結果、特に濃尾震災での震災孤児院において対象児童の顕著な「生活と発達の困難」の実態の一端が明らかとなった。

『名古屋震災孤児院報告』『孤児履歴』等の一次資料からは、家族を失った児童に夜驚症のような症状が見られたり、被災孤児の高い病死率や災害以前からの貧困・疾病の悪化など、様々な「生活と発達の困難」の実態が示された。震災孤児院の子どもたちは「災害以前からの家族問題、貧困問題、乞食経験などのトラウマ的体験」と「災害によるトラウマ的体験」の複合を抱えており、そのような発達困難を抱えていた子どもであったと分析できた。

突然の災害による家族の愛情からの切断が心身に与える発達困難（緘黙・ことばの障害、対人関係困難、摂食障害、おもらし・おねしょ、睡眠困難等々）が多種多様に存在していたと考えられ、その詳細は現代においても未解明であるため今後も歴史的検討を続けていく必要がある。

